

# 接骨院に 心理学を入れてみた

〔3-2〕

寺田接骨院 寺田弘志

JR 茨木駅近くの接骨院が私の仕事場だ。

開業して22年目になる。めったに休院することはない。

ただ、2月は久々に休院することになった。

父の葬儀のためだ。

2月17日土曜日、羽生結弓選手、宇野昌磨選手の男子フィギュア金・銀獲得を喜んでいたら、母から、父の具合が良くないという電話が入った。

郷里の京都府綾部市で、母が父を介護していた。

最近、口から食物をとることができなくなっていた。

前日、医師と母が、延命措置はしないが、水分の点滴だけはすることに決めたばかりだった。

医師によると、水分補給だけでも、1カ月くらいは持つこともあるという。

父が脳梗塞で倒れて18年になる。長い闘病生活だったので、1カ月くらいは持つような気がしていた。

しかし、施設に駆けつけると、ほとんど意識はなく、声をかけてもわずかに反応する程度だった。

呼吸は、チェーン・ストークス呼吸になっていた。

翌18日、呼吸は徐々に弱まって、昼過ぎに、父は静かに息を引き取った。82歳だった。

その後、葬儀社の人と打ち合わせをして、死亡届を出し、火葬場の予約をした。

夜中に茨木に戻る車の中で、小平奈緒選手が女子スピードスケート500mで金メダルをとったというニュースがラジオで流れた。

月曜日は、午前中仕事をしながら、予約の入っていた患者さんに、臨時休院の電話をかけ続けた。休院の張り紙をしたり、留守電を録音したりし、午後からは通夜のために郷里にもどった。

通夜と夜とぎをし、告別式、火葬、初七日を済ませ、いったん茨木に戻って水曜日の午前は接骨院を開け、午後から綾部のお寺さんに出向いて、四十九日のお願いをした。

茨木に戻る車の中で、今度は女子パシュートの決勝の中継をしていた。金メダルが取れた瞬間はうれしかったが、どこか遠くの世界の出来事のように感じられた。

2018年の冬は、オリンピックと父の死が重なって、記憶に残る冬になりそうだ。

葬儀の時、強く感じたのは、18年間お世話になった医療、介護などの対人援助職の皆さんや、両親の知人やご近所の方への感謝の気持ちだった。

家族葬でしめすと言っているのに、たくさんの方が弔問して下さり、感謝の気持ちで涙が止まらなかった。

その後も、もろもろの手続きが続き、気がつけば対人援助学マガジンの締め切りが近づいていた。

投稿は無理だと思って、団先生に休ませて下さいとメールを送って、ご了承をいただいた。

ところが、25日に東京マラソンで、設楽悠太選手が16年ぶりに日本記録を塗り替えるという快挙をなしとげた。

患者さんと「設楽選手がやってくれると思っていたんですよ」と会話をして思い出した——対人援助学マガジンの31号の追記を院内新聞に書いていたことを。

そこで急遽、この追記を「接骨院に心理学を入れてみた3-2」として投稿させていただくことにした。

(以下、寺田接骨院新聞58号 平成30年1月5日から転載)

### ★接骨院に心理学を入れてみた③の追記★

Aさんに教えてもらったのですが、ちょうどこの時期にテレビで放送されていた「陸王(りくおう)」は、箱根駅伝で今年も総合優勝した青山学院の原監督が監修していたそうです。

「陸王」の中では、マラソン選手の故障を防ぐために、靴底が薄くて軽いランニングシューズを開発する物語が描かれています。

「陸王」を観ていて疑問に感じたのが、選手の故障を少なくするためには、靴底が薄い靴よりも、ある程度厚みがあって、クッション性が高い靴がいいのではないかということです。

Aさんにその疑問をぶつけてみたら、「レースのときは、靴底が薄いほうがスピードが出ていいのではないか」という答えでした。

確かに、短距離の選手がはいっているのは、靴底が薄い靴ばかりです。スピードが出れば、選手の負担は減るかもしれません。

「陸王」では、「けがをしないためには、ミッドフット走法を身につけなければならない」という話が何度も出てきます。

「ミッドフット走法をするために、靴底の薄い靴が必要だということなのだろうか??」-----私にそんな疑問を残したまま、「陸王」は終わってしまいました。

皆さんは、今年の箱根駅伝のテレビ放送をご覧になりましたか。

私はチラッと観ただけなのでわからないのですが、ランニングシューズのことは放送で触れられていたでしょうか？もしご存知でしたら、ぜひ私にも教えて下さい。

「陸王」では、こはぜ屋対アトランティスというシューズメーカーのし烈な戦いが描かれていましたが、これと同じようなシューズメーカーの戦いが、箱根駅伝でも繰り広げられていたようです。

アディダス対ナイキの戦いです。

総合優勝の青山学院は、ミッドフット走法で薄い靴底のアディダスを使い、往路優勝の東洋大学は、フォアフット走法で厚い靴底のナイキを使用しました。

(ミッドフット走法は足の真ん中・中足部で着地する走法。フォアフット走法はつま先で着地する走法)

こはぜ屋対アトランティスは、どちらが薄い靴底を作ることができるかという戦いでしたが、アディダス対ナイキは薄い靴底対厚い靴底の戦いです。

青山学院は箱根駅伝4連覇、王者の貫禄があり、アディダスの評価は下がらないでしょう。しかし、青山学院は前年度大学駅伝3冠をとった時ほどの勢いはなく、2017年度は箱根駅伝1冠のみ。キャプテンは故障でメンバーからはずれ、5区の選手も途中で故障しました。

対する東洋大は1、2年生が主体で今後が期待されるチーム。出雲駅伝を制した東海大もナイキを使う選手が増えているといえます。

ちなみに、昨年ハーフマラソンの日本記録を10年ぶりに塗り替えた設楽悠太選手(東洋大学→HONDA)も、ナイキの厚底シューズを使っていたそうです。

これからの日本選手の活躍と、シューズがどうなっていくかが楽しみです。



↑ナイキ ヴェイパーフライ4%

### ★追記の追記★

東京マラソンで、設楽選手はこれと同じようなタイプ(おそらく設楽選手特別仕様)の靴をはいていました。

テレビ番組のインタビューでも、日本新記録の要因を「練習方法と靴を変えたこと」と答えていました。  
一気に厚底シューズ人気が高まるに違いありません。  
箱根駅伝も、東洋大が青山学院の5連覇を阻止するのではないか、そんな予感がします。